

童話「毒もみのすきな署長さん」と能「鵜飼」と常不軽菩薩

—署長さんの「毒もみ」と鵜使いの「鵜飼」の「面白さ」

田中成行

はじめに

宮沢賢治作の童話「毒もみのすきな署長さん」^{〔1〕}の、国で禁じられた「毒もみ」で魚を捕り死刑となる署長さんの最後の言葉、
「あ、面白かった。おれはもう、毒もみのことときたら、全く夢中なんだ。いよいよこんどは、地獄で毒もみをやるかな。」
を読む時、思い出される言葉がある。

それは能「鵜飼」^{〔2〕}の、殺生禁断の石和川^{いさわ}で鵜を使って魚を捕り、殺されて地獄に落ちていた漁師の言葉である。

「……おもしろの有様や。底にも見ゆる篝火に。驚く魚を追ひまはし。かづき上げすくひあげ。隙なく魚を食ふ時は。罪も報いも後の世も。忘れはて、おもしろや。……」

いずれも、その土地の法律を破って魚を捕り、捕まって死刑になっても「毒もみ」や「鵜飼」で魚を捕ることを「面白い」と言い続ける人物を描いているのである。

そこに、作者宮沢賢治が、童話「風の又三郎」等で描いた身近に見た子ども達が「毒もみ」という「川に山椒の皮汁を流し、それに酔って浮いてくる川魚をとる漁法」で魚を捕ることに夢中になっているように、「毒もみ」に夢中になり最後に「面白かった」と語る署長さんを、あるがままに生きる一人の人として大切に見つめ描く作者賢治の独自の視点を読み取りたい。

さらに、能「鵜飼」で、「鵜使い」という鵜を使って魚を捕る漁に「おもしろや」と夢中になり殺生禁断の川で殺され亡霊

となった主人公のシテの「漁師」を、「日蓮聖人」として当時の観客に理解されていたワキの「旅の僧」が、法華経で供養して成仏させる点に注目したい。

そしてこの能「鵜飼」が、童話「毒もみのすきな署長さん」の素材「本説」となった可能性や、宮沢賢治と世阿弥という時空を越えた作者の共通する価値観を、『法華経』にある「常不軽菩薩（又は常不軽菩薩）」の信仰を通して考察したい。

賢治が亡くなる二年前の病中で書いた『雨ニモマケズ手帳』の中の「一三五頁には、「◎高知尾師ノ奨メニヨリ／法華文学ノ創作……」と書き、一二一頁から一二四頁には「不軽菩薩」の詩が書かれている。

能の「夢幻能」では、「諸国一見の旅の僧」が遺跡を訪れ、そこに生きた人（もの）を思いやり、夢に現れた亡霊の「懺悔」として、「現世での一番の思い出を再現して歌舞で表す姿」を見守り供養する。その姿は、『法華経』の「不軽菩薩」が「全ての人に仏性が有り成仏する」と信じて、菩薩行として会う人毎に「あなたは必ず仏に成ります」と唱えて礼拝する姿と重なるようだ。

そしてそれは、善悪を越えて一人一人の尊さ仏性を信じ、「不軽菩薩」が菩薩行として礼拝する代わりに、菩薩行の「法華文学」として一人一人を大切に文字で描き結晶化していった賢治の姿と重なるのではないか。

一 賢治の蔵書『謡曲通解』に記された謡曲「鵜飼」と日蓮

作者賢治の蔵書目録の中に大和田建樹著の『謡曲通解』がある。「謡曲」とは歌舞劇である能（能楽）の詞章の意味であり、台本でもある。シテは主役、ワキはシテの相手役で、ツレはシテやワキを助ける役である。その謡曲の、代表作のあらすじやキーワードに注釈を施したものがこの『謡曲通解』である。

その中の「鵜飼」は、まず登場人物と舞台を、

「シテ（前後） 漁夫

ワキ 日蓮聖人

ツレ 従僧

處ハ 甲斐「」

とし、(シテの前ジテは漁夫だが、後ジテは、實際は地獄の閻魔大王である。) あらすじは、

「日蓮聖人甲斐の石和川にて鵜つかひの幽霊を成佛させる事を作れり。」

とあり、その本文では、

「是は安房の清澄きよすみより出でたる僧にて候ふ」

とあるワキの旅の僧を「日蓮聖人」としているのである。

「清澄」の注で、

「長狭郡にある山にて。山上に日蓮聖人の剃髪せし寺あり清澄寺と云ふ。此地名をあげて上人なる事を知らしむるなり。」
とあって、直接本文に「日蓮聖人」とは書かれてはいないものの、日蓮聖人ゆかりの寺の僧であることから「日蓮聖人」と定めているのである。

賢治の蔵書目録には入っていないが、昭和五年に佐成謙太郎によって書かれ口語訳もある本格的な注釈書、鑑賞書として多く読まれた『謡曲大観』にも、

「ワキ 旅僧(日蓮聖人)」

とあり、【出典】に、

「今甲斐國石和に日蓮宗の遠妙寺があり、日蓮が鵜使の亡霊を濟度したといふ傳説と共に、當時の遺物と称するものを傳へて居り、名勝志にも、大納言平時忠が罪を得てこの地に流された時、石和川の殺生禁斷を破つて鵜を使ひ、遂に土地の荒法師どもに搦められて河に投げられた、その亡霊が日蓮聖人の濟度によつて成佛したといっているが、いづれも謡曲以後の附會説と思はれ、本曲の原據と見るべきものは見當らない。」

とあり、「安房の清澄」の注にも、

「日蓮聖人誕生の地小湊の近くで、山中に清澄寺といふ寺がある。日蓮はこゝで出家得度した。この地名を出して暗に日蓮聖人であることを知らしめた。」

とあることから、賢治にとつても、能「鵜飼」のワキの僧は「日蓮聖人」という認識があったと考えられよう。

二 法華文学としての謡曲「鵜飼」

晩年『雨ニモマケズ手帳』に自ら記したように「法華文学」を目指した賢治が、「法華経の本は」として昭和五年（一九三〇）三月十日の手紙で教え子の伊藤忠一に薦めた本はこう記されている。

山川智応 和訳法華経

島地大等 和漢対照妙法蓮華経

ここに記された、^{しまじだいとう}島地大等編の『漢和対照妙法蓮華経』（明治書院、大正三年（一九一四））は、十八歳の賢治が読んで、感動し、『法華経』信仰の機縁となったとされる、親友保阪嘉内にも贈り賢治が「赤い経巻」と呼んだ本である。

そしてもう一冊が、国^{こく}社^{しゃ}会^{かい}の田中智学^{たなかちがく}と姉崎正治^{あねざきまさちか}の序文があり姉崎の「文学の方面に至りては、歌人にして法華二十八品の題詠を詠ぜざるものは、名匠にあらざるの感あり。源氏物語、榮華物語以下、謡曲より長唄に至るまで、法華経の感化を被るもの数ふるに遑あらず」と『法華経』の文学への影響の大きさを記した、山川智應^{やまかわちおち}の和訳による『和譯法華経』^{（新潮社、明治四十五年（一九一二）である。そこには附録として「和譯妙法蓮華經文學索引」が付いており、その「凡例」に、}

「○この索引は、博文館の『日本文学全書』二十四冊、ならびに、観世織部の訂正せし観世流謡曲内外百七十二番中より、法華経に關したる文々句々をおおよそ挙げて、本和譯の本文及び註釋を案内し、かつ必要なるは略解説を施し、又文學全書の誤植をも正しぬ」

とあって、「日本文学全書」二十四冊の名作に並べて、『法華経』に關する文句のある観世流の謡曲が挙げられている。

その「力行」の「經とはなどて名くらむ」に、

「それ聖教のとめいにて「鵜飼」〔とめいは都名なり聖教をすべて經とは名くるといふことなり〕……………」

と、「鵜飼」が引用されており、『謡曲通解』には、後ジテの地獄の閻魔大王が登場して語る最後の山場の「ロンギ」で、「ロンギ地有り難の御事や。那落に沈む惡人」を。佛所に送り給ふなる。其瑞相のあらたさよ。シテ法華は利益深き故。魔道に沈む群類を。救はん為めに來りたり。地實に有り難き誓ひかな。妙の一字はさて如何に。シテそれは褒美の言葉にて。妙なる法と説かれたり。地經とはなどや名づくらん。シテ夫れ聖教の都名にて。地二つもなく。シテ三つもなく。地唯一乗

の徳によりて。那落に沈みはてゝ。浮びがたき惡人の。佛果を得ん事は。此經の力ならずや。地是を見彼を聞く時は。たとひ惡人なりとても。慈悲の心を先として。僧會を供養するならば。其結縁に引かれつゝ。佛果菩提に至るべし。實に往來の利益こそ。他を助くべき力なれ。」

と、地獄に沈んだ「惡人」を救う『法華經』の力を、地獄の閻魔大王が語つて終わる場面の、その「經」の「名」の説明の言葉の一つとして記されている。

賢治がこの本の「文學索引」を引いたとき、この謡曲「鵜飼」の名を見ることがあつたであらう。

三 謡曲「鵜飼」の「鵜の段」として「仕舞」「独吟」の見せ場とされる詞章

謡曲「鵜飼」の一曲の中でも、独立した見せ場として現在でも仕舞で舞われ、聴かせどころとして独吟で謡われるのが次の詞章である。

シテ「鵜籠を開き取り出だし。

ワキ「島つ巢おろし荒鵜ども。

シテ「此河波にばつと放せば。

地「おもしろの有様や。底にも見ゆる篝火に。驚く魚を追ひまはし。

かづき上げすくひあげ。障なく魚を食ふ時は。罪も報いも後の世も。

忘れはて、おもしろや。

漲る水の淀ならば。生簀の鯉やのぼらん。玉島河にあらねども。

小鮎さばしるせゝらぎに。かだみて魚はよもためじ。不思議やな篝火の。

燃えても影の暗くなるは。思ひ出でたり月になりぬる悲しさよ。

鵜舟のかがり影消えて。闇路に帰る此身の。名残をしさを如何にせん。

「鵜の段」と称されるだけに、生き生きと鵜を使う場面が再現される。

そして「罪も報いも後の世も。忘れはて、おもしろや」の「罪も報いも後の世も」の詞章は、賢治の蔵書『謡曲通解』の注

では、「殺生の罪なる事も。遂に悪報を受くべき事も。未来に地獄に落ちんこともなり」とあり、「殺生の罪で地獄に落ちる」ことなど「忘れ果てて」、鵜飼を「面白や」と、心から楽しむのである。

一方、同じ殺生禁断の地で魚を捕り、ふし漬けの刑に処せられて海に沈められた漁師の霊の登場する能に「阿漕あこぎ」がある。伊勢神宮の禁漁区で漁をした漁師の霊は、九州から参詣に来た旅人に、「呵責の責めも隙なくて 苦しみも度重なる 罪甲らはせ給へや」と供養を請う。所の者の勧めもあり、旅人は「いざ甲らはん数かずの 法の中にも一乗の 妙なる花のひととき 苔の衣の玉ならば つひに光は暗からじ」と『法華経』で甲う。

するとそこに、漁師の霊が現れて漁を再現して見せる。

「阿漕が塩水こりもせで なほ執心の網置かん」と言つて、魚を網に追い込む姿を表現して見せるが、

「伊勢の海 清き渚のたまたまも 甲とふこそたより法の声 耳には聞けども なほ心には ただ罪をのみ
もちあみの 浪はかへつて 猛火となるぞや あら熱つや 堪へがたや

丑三つ過ぐる夜の夢 丑三つ過ぐる夜の夢 見や因果の廻り来る 火車に業積む数 苦しめて目の前の 地獄も真なり
げに 恐ろしの気色や 思ふも恨めしいにしへの 思ふも恨めしいにしへの 娑婆の名を得し 阿漕がこの浦に なほ執
心の 心引く網の 手馴れし鱗うろこ類今はかへつて 悪魚毒蛇となつて 紅蓮大紅蓮の氷に 身を傷め骨を砕けば 叫ぶ息は
焦熱大焦熱の 焰煙雲霧 たちゐに隙もなき 冥途の責めも度重なる 阿漕が浦の 罪科を 助け給へや旅人よ 助け給
へや旅人として また波に入りにつけり また波の底に入りにつけり

と、「罪」を思い出し、殺生の「罪の報いの後の世」の地獄の苦しみを表すこととなり、捕った魚は悪魚毒蛇となつて責め苛み、「助け給へや旅人」と助けを求めて消えて行くのである。

同じ『法華経』で甲われる曲でも、これだけ違いがあるのである。

他には能「善知鳥とら」が、善知鳥という鳥の「うとう」と呼べば「やすたか」と答える親子愛の習性を活かした狼をして逆に地獄で苦しめられる様が描かれる。

しかし能「鵜飼」は、殺生に関わる能の中でも独自である。旅僧は日蓮と直接名乗らないけれども、賢治をはじめ『法華経』や日蓮を知る者や、当時の能の鑑賞者にとっては、自然に日蓮を思い浮かべる、身近で親しみのある曲であったであろう。

では罪である「鵜飼」を地獄から戻りあるがままの姿で再現して「罪も報いも後の世も忘れはてて面白や」と本音を表す能「鵜飼」と、罪である「毒もみ」を「ああ、面白かった。おれはもう、毒もみのことときたら、全く夢中なんだ。いよいよこんどは、地獄で毒もみをやるかな」と本音を表す童話「毒もみのすきな署長さん」の共通する価値観とは何かを考えてゆきたい。さらに注目したいのは、能「鵜飼」において『法華経』で供養する旅僧として当時理解され、『法華経』を信仰する賢治に「遠い先生」と言われた日蓮が、「日蓮はこれ法華経の行者なり。不^ふ軽^{きやう}の跡を紹^{しやう}（承）継^{けい}するの故に」（『聖人知三世事』二八頁）と、自らの体験と重ねて何度も言及し目指した『法華経』「常不^{じやうふ}軽^{きやう}菩薩^{ぼさつ}品」に描かれ釈迦の前世の姿とされた「常不^{じやうふ}軽^{きやう}菩薩^{ぼさつ}」または「不^ふ軽^{きやう}菩薩^{ぼさつ}」である。

四 賢治と能と国柱会

大正九年（一九二〇）五月盛岡高等農林学校研究生を修了した二十四歳の賢治は、十一月田中智学を中心とした日蓮主義の団体である国柱会に、賢治の父政次郎の従弟であり三歳年下で賢治を兄のように敬慕した関徳彌（筆名・登久也）より先に入会し、関にも勧め共に入会したとされる。翌大正十年（一九二一）賢治二十五歳の一月三十日付関宛の手紙（書簡一八五）によると、家を出奔した賢治が上野に着いてすぐに国柱会を訪ね「下足番でもビラ張りでも何でも致しますからこちらでお使い下さいませいか」と申し出た賢治に「……まづどこかへ落ちついてからあなたの信仰や事情やよく承った上で御相談致します」と応対したのが高知尾智耀^{たかちおち}であったという。そこで東京大学前の小さな出版社に入り、

「謄写版で大学のノートを出すのです。朝八時から五時半迄座りつ切りの労働です。周囲は着物までのんでしまつてどてら一つで主人の食客になつてゐる人やら沢山の苦学生、弁（ベンゴシの事なさうです）にならうとする男やら大抵は立派は過激派ばかり……（中略）……さあこゝで種を蒔きますぞ。もう今の仕事（出版、校正、著述）からはどんな目にあつてもはなれません」

と、「著述に生きる」宣言をしている。後に『雨ニモマケズ手帳』で、

「1、◎高知尾師ノ獎メニヨリ／法華文学ノ創作／名ヲアラハ（ス）サズ、／報ヲウケズ、／貢高ノ心ヲ離レ、」

と賢治が記す高知尾との出逢いであり、「法華文学の創作」の出発でもあったと言えよう。童話「毒もみのすきな署長さん」

の執筆は、この年大正十年（一九二二）の夏から大正十三年（一九二四）頃と推定されている。

それは、賢治が大正十年十二月、稗貫郡立稗貫農学校（大正十二年（一九二三）四月一日、県立花巻農学校と改称）の教諭となり、大正十一年創作劇『飢餓陣営』を上演し、大正十二年「花巻農学校精神歌」の作詞作曲や創作劇『植物医師』の上演。大正十三年には心象スケッチ『春と修羅』とイーハトーブ童話『注文の多い料理店』を自費出版し、農学校では生徒らと創作劇『飢餓陣営』『植物医師』『ボランの広場』『種山ヶ原の夜』を上演し一般公開する等、教育の場において、個性豊かな生徒達一人一人を、正に「不軽菩薩」のように敬い尊び大切にして、共に文芸や文学に取り組んだ時でもあった。

東京上野鶯谷に設立された国柱会館は、洋風二階建ての二階は大広間で、能^ノ舞台があり、千人以上の収容力があって、講演会、国性劇の公演等が度々行われたという。『国柱会百年史』（国柱会、一九八四年）には、明治四十三年（一九一〇）に東京鶯谷の国柱会館と共に能楽堂のある静岡県三保の最勝閣で富士山の麓にふさわしい能「羽衣」と、田中智学が創作した謡曲が上演された記録がある。そして智学は、大正十一年（一九二二）十一月十一日付けで「人間ノ根本心ヲ讚美シ、世界ノ理想郷ヲ闡揚シテ」等と「芸術の靈化」を宣言し、舞台芸術による教化、布教の新構想を立て、演劇学校の「国性文芸会」を創立して、演劇を第一としつつも、その他の科目に「能楽」もあった。

賢治の文学を支えた妹トシがその年の十一月二十七日二十四歳で亡くなった。翌年の大正十二年（一九二三）一月に賢治が国柱会館を訪れ智学の創作劇『函谷関』を弟清六と観劇し、その後トシの納骨の手続きをしたとされる。その年の四月二十一日、賢治はその「国性文芸会」に賛同して入会し、七月二十九日には賢治作「花巻農学校精神歌」が「天業日報」に掲載され、関東大震災の義捐金も国柱会を通して送っている。入会后、能を含めた法華文学の創作意欲を大いに滾らせた可能性は高い。

五 賢治と「不軽菩薩」

賢治は『雨ニモマケズ手帳』に一二二頁から一二四頁まで四頁にわたって「不軽菩薩」のことを赤鉛筆で刻みつけている。

「あるひは瓦石さてはまた／刀杖もつて追れども／見よその四衆に具はれる／仏性なべて／拜をなす（一二二頁）
不軽菩薩（一二二頁）一頁全部を使った大きな一語で

菩薩四の衆を礼すれば／衆はいかりて罵るや／この無智の比丘いづちより／来りてわれを礼するや（一二三頁）

我にもあらず／衆ならず／法界にこそ立ちまして／たゞ法界を法界を／礼すと拜をなし給ふ（一二四頁）
また文語詩未定稿（宮沢賢治全集4、ちくま文庫、二九一頁）には、

「不輕菩薩」

「あらめの衣身にまとひ／城より城をへめぐりつ／上慢四衆の人ごとに／菩薩は礼をなしたまふ

（われは不輕ぞかれは慢／こは無明なりしかもあれ／いましも展く法性と／菩薩は礼をなし給ふ）

われ汝等を尊敬す／敢て輕賤なさざるは／汝等作仏せん故と／菩薩は礼をなし給ふ

（こ、にわれなくかれもなし／たゞ一乗の法界ぞ／法界をこそ拜すれと／菩薩は礼をなし給ふ）」

と、たとえ慢心を持ち瓦石を投げつけ刀杖で打ち付ける人であっても、あらゆる人を一人一人仏と成る人として敬い礼拝して呼びかける不輕菩薩の姿を描いている。

それは、賢治が十八歳から「赤い経巻」と呼んで熟読した『漢和对照妙法蓮華經』にも、

「……是の比丘、凡そ見る所有る、若は比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷を皆悉く禮拜讃歎して、是の言を作さく、

我深く汝等を敬ふ。敢へて輕慢せず。所以は何ん。汝等皆菩薩の道を行じて、當に作佛することを得べし。

而も是の比丘、専らに經典を讀誦せずして、但禮拜を行す。

乃至遠く四衆を見ても、亦復故らに往きて禮拜讃歎して、是の言を作さく、

我敢へて汝等を輕しめず。汝等皆、當に作佛すべきが故にと。

四衆の中に、瞋恚しんいを生じ、心不淨なる者有りて、惡口罵詈いして言はく、……〔中略〕……此の如く多年を經歷して、常に罵詈せらるれども、瞋恚を生ぜずして、常に是の言を作す、

汝當に作佛すべし。

是の語を説く時、衆人、或は杖木、瓦石を以つて、之を打擲すれば、避け走りて遠く住して、猶高聲に唱へて言はく、

我敢へて汝等を輕しめず。汝等皆當に作佛すべしと。……」

と、会う人全てを敬い「あなたは仏と成る」と言い続け、瞋いつて惡口を言われても長い年月決して瞋いらず、杖木で打ち瓦石を投げつける人がいても、逃げて走って遠くから大声で「あなたは仏と成る」と唱え続けて、「常不輕」と呼ばれた菩薩は遂に

仏と成ったという。ここで言う「菩薩」とは、自分だけでなく一人でも多く成仏させようとこの世で努める修行を経て未来に仏となる者のことである。

このように、賢治によってこだわりを持つて描かれた『法華経』の「不軽菩薩」と呼ばれた菩薩の言動とその価値観、さらにこの菩薩の信仰のあり方とそのイメージを、賢治の蔵書や賢治の眼に触れたと思われる身近な書籍に描かれた内容から追究してみたい。

六 蔵書『西行物語』の中の「不軽菩薩」

賢治の『雨ニモマケズ手帳』にも記され、「雨ニモマケズ」の「デクノボー」のイメージとも重なりとされ、賢治がこだわりのをもって大切にした「不軽菩薩」。

その姿が描かれた文学作品を蔵書目録で探してみると、「日本東洋古典」のジャンルの中の「續帝國文庫」⁽⁶⁾（博文館発行）第四十九編に『西行物語』がある。

現在の研究では西行亡き後五十年を経て実録風に書かれた物語とされるものであるが、西行の事実の物語として読者に読まれ続けてきたことが大切である。

また、実際、西行自身も「不軽菩薩」のことは十分理解していたと思われ、その歌集の『聞書集』に「法花経廿八品」の題の連作があり、各品の順に偈の一節を題としてその心を詠んだその歌の中に「不軽品」があって、賢治の読んだ『漢和対照妙法蓮華経』にも引用されている歌がある。

「万世を衣の岩に畳み上げてありがたくてぞ法は聞きける」

と、長い年月の間、「忍辱の衣」という厳しい迫害にも耐えさらに相手を敬い慈悲で包む菩薩行の実践を、投げつけられた石より大きく堅固な岩のように積み重ねて伝えた「不軽菩薩」。彼によって『法華経』を聞くことのできるありがたさを、粗末な衣を身に纏って人々を礼拝する菩薩の姿とその声のイメージを重ねて歌っている。

鳥羽院の北面の武士であった佐藤義清（ここでは藤原憲清）が、出家して西行法師となった後、東下りの途中の事件の一つに「東国下向天龍の渡りにて難に合事」がある。西行が天龍川を渡るうとして、武士の乗った舟に便船しようとしたところ、

人が多すぎたので、武士から「あの法師おりよ〜」と言われたけれど聞き流していたら、武士に鞭で打たれ頭から血を流したが、西行は少しも恨んだ様子もなく、手を合わせ合掌して舟から下りた。これを見た供の入道が泣き悲しんだので、西行がつくづく見守って仏道修行のあるべき姿を語ったのが次の言葉だ。

「都を出し時、みちの間にて、いかにも心くるしき事あるべしといひしはこれぞかし、たとひあし手をきられ、命をうしなふとも、それまつたくうらみにあらず、もしいにしへの心をも持へくは、かみをそり、衣をそめてこそあらめ、佛の御心は、みな慈悲を先として、我らがごとくの造悪不善のものをすくひ給ふ、さればあだをもてあだをはうずれば、其恨みやまず、恩をもて讎を報ずれば、あだすなはち滅すといへり、経の中には、無量劫の間修したる善根も、一念の悪をおこせばみな焼失すともいへり、又不輕菩薩は、うたる、つえをいたまず、我深敬汝等、不敢輕慢、所以者何、汝等皆行菩薩道とて、なほ礼拝恭敬し給ひき、これみな利他をむねとし、佛道修行の姿なり、自今以後もかゝる事はあるべし、たがひに心くるしかるべければ、なんちは都へ帰れ」

という言葉で、「不輕菩薩」の例を引き、武士の身分を捨て出家した者の覚悟として「たとえ自分を杖で打つ者がいてもそれを痛がらず」「私は深く敬いますあなた方を、決して軽んじたりあなどったり致しません。なぜならば、あなた方はみな菩薩に成り行くのだから」と言つて、その打った方々を猶も礼拝し続けられた」と仏道修行の理想の姿の一つの典型として語っている。

さらに注目すべきは、「仇をもて仇を報ずれば、その恨みやまず」「恩をもて讎（仇）を報ずれば、仇すなはち滅す」と、「憎悪の連鎖を断つ」「不戦の極意」を述べていることである。西行は、俗名を佐藤義清といい、俵藤太藤原秀郷を遠祖とする勇者の家柄に生まれ育ち、北面の武士として二十三歳まで仕えた上で出家した。源平の合戦に明け暮れる「武者の世」の殺し合い滅ばし合う無常の世の中を見つめ尽くした上での出家であり、僧であり歌人でもある「不戦西行」の誕生である。

そこには、現代世界の共通の大きな課題である、テロ等で繰り返される「負の連鎖」「憎悪の連鎖」を断ち切る極意、普遍的な真理が表現されていると言えよう。

七 『雨ニモマケズ手帳』に描く「土偶坊」の「土」と原点としての「不輕菩薩」

賢治が、亡くなる二年前の病床で『雨ニモマケズ』等と共に、『雨ニモマケズ手帳』に書いた劇の構想メモに「土偶坊」がある。そして題名の「土偶坊」の後に第一景から第十一景まで場面が分けられ、簡単な内容がメモされている。

その題名の後に「ワレワレカウイフモノニナリタイ」とあって「雨ニモマケズ」の「サウイフモノニワタシハナリタイ」とほぼ重なる表現であることや、「第二景」に「デクノ坊見ナイナ ウーイ」とあることから、「土偶坊」はここにおいては「デクノボー」と読むことがわかる。

さらに「第三景 青年ラワラフ 土偶ノ坊 石ヲ 投ゲラレテ通ゲル」の表現から『法華経』の「常不輕菩薩」のイメージが生かされた内容であろうと考えられてきた。

ただし、「デクノボー」は一般的には「木」の「木偶でくのぼうの坊」と表現されるのだが、手帳では「土偶どぐ（ノ）坊」と表現されており、その理由は、「詩ノート」一〇三五（一九二七、四、一一）の「（えい木偶のぼう）に「えい木偶のぼう」：（中略）：おれの仕事を見てやがる／黒股引きの泥人形め：（以下略）」とあること等により「木」を「土」とした誤記説から、岡村民夫氏の『イーハトーブ温泉学』（みすず書房、二〇〇八年）にある賢治に身近だった郷土玩具の「花卷土人形」のイメージ説という地域に密着した興味深い説等がある。

しかしメモの表現の「第五景 ヒデリ」や「第六景 ワラシャドハラヘタガー」等に注目すれば、土を耕して苦勞する農民親子や家族の生活に関わる登場人物だから「木」ではなく「土」の「土偶坊」とされたのだとも考えられよう。

ここでさらに、「土偶坊」の「土」という表現に関わると思われる「不輕菩薩」を描いた仏教説話を紹介したい。それは、賢治の蔵書の中の多くの仏教関係の本や全集の一作品としてや、出版されたばかりの『續群書類從ぞくぐんしゆりよく』卷第九五四、雑部一〇四（大正十三年（一九二四）発行）等を通して賢治に読まれた可能性があると思われる仏教説話集の一つである『閑居友かんきよとも』の中の一話である。

鎌倉時代前期、摂政太政大臣に至った藤原良経の嫡男で摂政関白となる九条道家の兄である僧・慶政けいせいの作とされる。慶政の父良経は、藤原定家等を後援し共に『新古今和歌集』の選者となり仮名序も執筆する等、当時の文化をになう代表的な歌人で

もあつた。弟道家は、母が源頼朝の姪であり、四男頼経が三代將軍実朝暗殺後四代將軍に迎えられ、長女が後堀河天皇の中宮となる等、朝廷と鎌倉幕府との公武間に大きな力を持った。承久四年（一二二二）頃、渡宋後のこの慶政により宮中の姫君の一人に献上するために成立したとされる「閑居友」上巻第九話「あづまの方に不軽・拝みける老僧の事」である。その冒頭の文に、中ごろ、あづまの方に、年いとたけたる聖の、いひ知らず汚けるが、髪長く、着物穢れたるありけり。見と見る人（を）拝みて、「我深敬汝等。不敢輕慢。所以者何。汝等皆行菩薩道。当得作仏」の文をなん唱へける。拝むとても、な（ほ）ざりの気なし。誠を致してぞ見えける。いかにもたゞにはあらず、深く思ひ入れたる人なるべしと見えけり。さて、人などの会はぬ所にては、いとまを惜しみて、いと速くぞ走りける。足などには、膝まで土ども染み付きて、額、手も土かたにてぞ侍ける。いかなる所をも嫌はず拝みければ、さこそは侍けめ、思ひけん心の底深かるべしと覚えて、聞くもかしこく侍。（傍線は筆者による。）

とあり、「不軽菩薩」の唱えた成句を見る人毎に唱えて拜んだこの聖が、「足などには、膝まで土ども染み付きて、額、手も土かたにてぞ侍りける。」と、人を拝むために時を惜しんで走り回るので、「土かた」つまり手足から額まで土だらけだったと言うのである。まさに「土偶坊」である。さらに続けて、

この国には、何とならはして侍ける事や覽、七月十四日にぞ、貴き賤しきもなく、この勤め（を）ばし侍。たゞの時はいとかたく見え侍にや。これは、釈迦如来、昔、不軽菩薩といはれ給し時、し初め給ける行なひなりければ、いつとなくも、し侍べき事にこそ侍めれ。されば、証如聖などは、この勤めをして家ごとに歩き給ひしぞかし。「ある時は、門にて常ならぬ匂ひ（を）かぐ」など見ゆれば、たのもしくぞ聞こゆる。

すべてこの不軽といふ事の心は、衆生の胸の底に仏性のおはしますを、敬ひ拝み奉る也。我等がやうなる惑ひの凡夫こそ、この事（わ）りを知らねども、悟りの前にはいかなる蟻・蝸蛄までも思ひくたすべきものなく、仏性をそな（へ）て侍也。地獄、餓鬼までもみな、仏性なきものはひとりもなければ、この理を知りぬれば、あやしの鳥、けだ物までも、尊からぬ事なし。されば、仏、涅槃に入り給はんとせし時、大きな光（を）放ち給て、十方を照し給しに、地獄の底までその光至りて、光の中に声ありて、「もろくの衆生にみな仏性あり」と唱へしかば、その苦しみ、みな除こりて、天上に生まるとぞ侍める。こまかには涅槃経に見（え）たり。…（中略）…

また、かやうによろづの人に仏性の(を)はします事を知りなば、人(を)憎み、嘲る事なども、(を)のづからとまる中立ともなるべし。…(以下略)

とある。「不軽の行」とは「衆生の胸の底に仏性のおはします」という心で会う人毎に敬い拝む事であるという。

美濃部重克氏は『閑居友』(中世の文学、三弥井書店、一九七四年)で、「不軽行」の実践には二通りあり、一つは父母への報恩のために修し、また一つは隠徳の聖が菩薩行として修したものであるという。この話は後者の例といえよう。

そして東国でその「不軽行」が七月十四日に行われたとある。

日蓮もその杖木の苦難を自らの刀剣の難と重ねて引用し、大切にした「不軽菩薩」のその実践を、日蓮より六十年前に生まれた藤原定家が、同じ七月十四日に「不軽行」として実践していたことが定家の日記『明月記』に記されている。

八 藤原定家の「吾事」としての文学と「不軽菩薩」

鎌倉時代初期の代表歌人で、源平争乱や承久の乱等の乱世を生き抜き、日記『明月記』の治承四年(一一八〇)十九歳の源平争乱開始の時、「紅旗征戎非吾事」と記し「官軍だの、反乱軍の征伐だのということとは、私のやるべきことではない」「吾事」つまり「私のやるべきこと」とは、「武器を持ち武力で人を傷つけることではなく、筆を持ち歌や文学の力で人を生かすことだ」と『白氏文集』の詩文を生かして決意を宣言している。其の筆跡から、他見を意識し七十歳前後に書き加えたものという説もあるが、十九歳だろうが七十歳だろうがこの「不戦と文学遂行の決意」は尊い。

廣田哲通氏の論文「法華経常不軽菩薩品二十が生む説話——閑居友上巻九話を基点として」(『説話文学研究』第十八号、一九八三年)によると、『明月記』に九例を見る。ところがそれ以外に当時の日記記録類また大日本史料においても例を見いだすことができない。この行があまり広くおこなわれたものでないのか、私的なものであったので公的記録には残らなかったのか、あるいはある種の階層、地域に限られていたのか、理由は明らかでないが、とにかく見いだせないという。さらにその定家の九例のみから推し量ると、「すべて七月十四日の記事」で、内容は「お盆に関係があること、路頭でおこなったこと」「不軽を礼す」と記すのみで、不軽菩薩にならって同様の行為をなしたと考えるしかない。ただ父母報恩型の不軽行と七月十四日の不軽行とが通底していることは十分予想されるところである。」とある。

ここで注目したいのは、十三世紀初めである鎌倉時代前期の七月十四日の「不輕行」の記録が藤原定家の日記『明月記』の九例しか見いだせないということである。

次にその九例を『群書類従』本から抜き出すと、

・ 正治二年（一二〇〇）、（定家三十八歳）

七月十四日、天晴、未時許拝盆供送法性寺、入夜密々乗車出八條面、禮不輕、亥時許法性寺方有火、小屋云々、桂松火所付云々、…（以下略）

・ 建仁二年（一二〇二）、（定家四十歳）

七月十四日、天晴、不出行、入夜乗車東洞院面禮不輕、盆供等如例、貧乏子年増不能修小善、悲而有餘、

・ 建仁三年（一二〇三）、（定家四十一歳）

七月十四日、天晴、夕行九條、路頭禮不輕、

・ 元久元年（一二〇五）、（定家四十四歳）

七月十四日、天晴、參院、為水練御川上、去十日又如此、諸人裸形渡平等院前庭、又裸乘馬、不置鞍、行列之躰密驚目、與大府卿隱于後戸方伺見、窃歎息如夢、冥鑒如何、禮佛入宿所、今夕御幸平等院之由雖聞、無程不能參、私出橋邊禮不輕、

・ 安貞元年（一二二七）、（定家六十六歳）

七月十四日、天晴、夜月間陰、大谷齋宮御所惱重之由傳聞、令書狀示送戸部局、自朔日令發給云々、午未時之間暑熱難堪、不能念誦、甚無力、月出後、南地之口家中之青女、此間立門屋、有一間棧敷、雖半作懸簾、於其所禮不輕、歸來之間、坤有火、南風甚到、是柱松之失歟、傳聞姉小路堀川及三條坊門油小路云々、陣口歟、後聞内裏南築垣火付云々、

・ 寛喜元年（一二二九）、（定家六十八歳）

七月十四日、己卯、朝間陽景間見、陰雲不晴、…（中略）…父祖共三位、於此身者年來雖成夕郎望、遂以叙了、惣末代事、將相三諸大夫之外、不可有機縁事歟、詔而女子於棧敷、令禮不輕、依行歩不叶、不能寸歩、懺法例時經一部、諸家説古今有父母人、令明殊魚食云々、予有所存、如此令随佛事、…（以下略）

※（・「諸家説古今有父母人、令明殊魚食」の「令明」は「今日」か。）

・寛喜二年（一二三〇）、（定家六十九歳）

七月十四日、雨止、朝雲分、已後天晴、早旦頭沃菊湯、自殿下給部類萬葉（集）二帖、蓮華王院御物云々、第一第二季時入道書く之、可書寫進者、自春手腫之後彌不能執筆、但給置可書試之由申之、扶微力念誦、頗平臥、月出乗車出之、雲路亂不輕婦入、近年民家今夜立長竿、其鋒付如燈樓物、張紙舉燈、遠近有之、逐年其數多、似流星、人魂（夜）著綿、

※（「乗車出之、雲路亂不輕」は「乗車出出雲路禮不輕」の誤記と考えたい。正治二年に「乗車出八條面、禮不輕」とあるので、この「之」を「出」とし、「亂」を「禮」とすると、「乗車出出雲路禮不輕」となり、天福元年の「車令引出出雲路」とも重なる。稻村榮一氏の『訓注 明月記 第5卷』（松江今井書店、二〇〇二年）二九二頁に「こも自宅に近い出雲路に車で出かけ、不輕に拝礼した意の誤りであろう」との指摘に筆者も同意する。

・村山修一氏は『明月記——鎌倉時代の社会と世』（高桐書院、一九四六年）で、頼朝が文治二年（一一八六）七月十五日の盂蘭盆に萬燈會を行ひ二親以下尊靈の解脱を念じ、建久元年（一一九〇）の盂蘭盆には平氏滅亡衆等の黄泉を照らすため萬燈會を行うなど保元以来の源平合戦等での怨靈鎮撫の燈火を点じて冥土を照らす行事が、民間にも流布したことをまとめ、寛喜二年のこの「近年民家今夜長竿を立て、其鋒に（紙張りの）燈樓の如き物を付け、灯を挙げ、遠近之れ有り、逐年其の數多し、流星人魂に似る」もその現れとする。）

・天福元年（一二三三）、（定家七十二歳）

七月十四日、丙辰、朝微雨即晴、黄門婦參土御門殿、小御不例云々、拈（手偏に先）起終毎年所作、筋力可燃有若亡、至于黄昏奉讀一部、居而不能居、劳苦之令然、乍生如亡、二代之御盆存例送嵯峨、月明雇香、女子、令禮不輕、車令引出出雲路俗習有父母者今日魚食云々、於予不忌憚、適好念誦者齋日晝食極無其詮、訪世々父母事、不可依今生二親、

・文暦元年（一二三四）、（定家七十三歳）

七月十四日、辛亥、天晴、暑氣殊甚、辰時許承榮法橋御使来云々、答他行由、今明日客人殊難堪、拭汗扶病奉讀經一部、逐年衰損窮屈若有若亡、夜香尼公為代官、令禮不輕、車盆供存例送嵯峨、申終許金吾来、御幸日以後御脚氣御不快無出御、供御殊御違例云々、驚歎不少、末世之儀代々偏以狂亂至于今、朝廷無人而雖德政不被行、於叡慮无一事之非據、思之還可恐事歟、南京自一昨日和解無為云々、當時憤鬱物三井寺許歟、今日參御月忌、左兵長清二人云々、即帰了云々、今朝權

花初開、女郎已盛、萩一両枝僅開、

とある。定家は、八条、九条という都の果てや、出雲路という古代出雲氏の住んだとされる鴨川西岸の鞍馬口に通じる都の境へ、月夜や夕方、牛車に乗って出かけて行き、三十代四十代から六十代の頃まで、路頭で自ら「あなたは必ず仏に成られます」という意味の「我深敬汝等。不敢輕慢。所以者何。汝等皆行菩薩道。當得作仏」の偈を唱え、道行く人々を一人一人礼拝し敬う「不輕を礼す」「不輕行」をおこなっていたらしい。松本寧^{やすし}至氏は、「なぜ常不輕か」（『日本古典文学の仏教的研究』、和泉書院、二〇〇一年）で、直接ではなく行をおこなう僧を礼拝したとされるが、まず自ら「不輕行」の場に行くことを大切にしたい。寛喜元年の六十八歳の時には「依行歩不叶、不能寸歩」と、自ら歩いて行く事が出来なくなり代わりに娘達に棧敷で礼拝させており、七十代になると、さらに暑さや体調のこともあり、二人目の妻である西園寺実宗の女（娘）との間に生まれた次女であり、嫡男^{ちかひ}為家の二歳上の姉でもある香に「不輕行」を代行してもらったことが具体的に記されている。香は、女官として典侍局に仕えていたが、一歳上の姉である後堀河院民部卿典侍が仕えていた四条天皇の母^{おん}子^みの二十五歳の若さでの逝去のため出家したときに、同じく出家したらしい。

ここで、「不輕行」での定家の自ら「行く」ことへのこだわり注目したい。賢治が「雨ニモマケズ」で、「デクノボー」と呼ばれつつ、東西南北「北」は手帳の前頁に赤鉛筆で「行ッテ」とあるのを「戯書^{ぎしよ}」ではなく推敲と考えたい）に自ら出かけ行くことを願い、そのこだわりとして「行ッテ⁹」とあることとの重なりを想起しつつ。

元久元年（一二〇四）、定家が四十四歳の七月十四日に、主家の藤原良経に従って宇治の平等院に後鳥羽院の御幸迎えの準備のため行った時、私に橋の辺に出て行き「不輕行」を行ったことが記されている。

建久四年（一一九三）定家三十二歳の時亡くした『源氏物語』を愛読した母美福門院加賀や、元久元年その年の十一月三十日に九十歳で亡くなる父俊成を思つての「不輕行」であつたのかもしれない。

七月十四日の「不輕行」の後に「父母の有る者は今日魚を食べる俗習がある」ことが、寛喜元年（一二二九）定家六十八歳の時と、天福元年（一二三三）七十二歳時とに記されており、早く三十二歳の時に母を四十四歳の時に父をと二親を既に亡くしている定家は、自分には関わらないことと言いつつ、「不輕行」と関わる親孝行としての滋養をとる「魚食」へのこだわりを表しているようだ。「魚食」は、定家が安貞元年（一二二七）九月二十四日に「魚食法師」と表し、賢治が「四恩抄」の抜き

書きで「日蓮はさせる妻子をも帶せず魚鳥をも服せず」と表すように、当時の僧の頽廢を表すが、人としてあるがままに生きることを肯定し敬う「不輕行」ゆえ、『発心集』の「仏みやう」のように「食物は魚鳥をもきはらず」と、自ら実践する聖もいたようだ¹⁰。

建長四年（一二五二）成立の幼少用の啓蒙書とされる説話集『十訓抄』中、第六「忠直を存すべき事」の十九に、白河院が仏教に篤く天下に殺生禁制の法を出し、魚鳥が手に入らなくなった時、貧しい僧の老母が魚なしではものを食べなくなってしまうため、僧は罪を覚悟で自分で桂川の魚を捕り、官人に捕まったが、せめて母に食べさせてほしいと願ったので、その言葉を聞いた人々は涙を流し、その「孝養の志をあはれみ」、許されたという話も思い出される。

筆者の母は今八十六歳。認知症で寝たきりの要介護5で流動食だが、スプーンを前歯のない歯でがちりと嚙んで離さぬ時、港育ちで魚が好きな母に好きな魚の寿司をこりこりと存分に嚙んで食べさせたくなくて泣けてくる。

一人一人を尊ぶ「不輕行」の原点が、最も身近な家族であり、一人の人でもある母への愛情として描かれている。いわゆる「父母報恩型」の「不輕行」である。『雨ニモマケズ手帳』に「父母の下僕となりて／その億千の恩にも酬へ得ん」と記した賢治にも「父母報恩」の願いは「不輕行」と共に強くあったであろう。

三田村雅子氏は『記憶の中の源氏物語』（新潮社、二〇〇八年）で、紫式部が仕えた中宮彰子や道長から天皇を含めた宮廷の男女を熱中させた『源氏物語』の魅力を生き生きと伝えている。そして道長により摂関家代々の宝として『源氏物語』は宇治平等院の宝蔵や比叡山延暦寺の宝蔵に秘蔵されたという。その後鎌倉時代となり定家の父俊成により「源氏見ざる歌詠みは遺恨のことなり」と知識教養としても尊ばれ、一方で母美福門院加賀によって「源氏物語創作とその耽読を仏教的な「罪」として、懺悔を図る源氏供養」が初めて行われたという。

久保田淳氏は『王朝の歌人 藤原定家』（集英社、一九八四年）で、建久二年（一一九三）二月十三日、母美福門院加賀を喪った三十二歳の定家が旧暦「初秋の七月九日、台風めいた強い風が京の街を吹きすぎ、雨をもたらした」時、父俊成を見舞い、「たまゆらの露も涙もとどまらずなき人恋ふる宿の秋風」と歌い、父は返歌を「秋になり風のすずしく変るにも涙の露ぞしのに散りける」と詠んだ時、『源氏物語』の桐壺の巻、野分の巻、御法の巻等の二、三の場面を想起していたにちがいないと言い、養母紫の上が秋亡くなった後、初めて垣間見た面影を思い起こしている夕霧と自分を重ね合わせている定家を「虚構

である『源氏物語』の叙述が、この悲しい体験に遭遇したことによって人生の真実として了解され、定家はおのずとそのような行動をとらされている」と言う。その『源氏物語』の力、文学の力を定家は実感し、「吾事」として実人生に活かしている。

九 『源氏物語』と「不軽菩薩」

平等院といえば、宇治であり、定家が父母から教えられ、注釈書である『奥人』も書いているごとく、よく読み、歌にも「本説取り」をしてよく取り入れ、その価値の尊さを認め自ら書写し伝えてきた『源氏物語』の、「宇治十帖」の舞台である。

そして宇治に住んだ八の宮が念仏往生を目指して念仏三昧で亡くなった後、成仏できぬと導師である阿闍梨の夢に現れ、極樂往生するために追善供養をしてほしいと願った八の宮のために行われた「不軽行」が思い出される。そこで元久元年（一二〇四）七月十四日、「不軽行」を行った定家も、八の宮のための「不軽行」を当然思い浮かべていただろう。

「総角」^{あげまき}巻で、薫が重篤の大君の病平癒のため昼夜『法華経』による不断経の読誦をさせた暁に阿闍梨は、大君の父八の宮が夢枕に立ったことを次のように語る。

「いかなる所におはしますらむ。さりとて涼しき方^{かた}にぞ、と思ひやりたてまつるを、先づ頃夢になむ見えおはしましたし。俗の御かたちにて、世の中を深く厭ひ離れしかば、心とまることなかりしを、いささかうち思ひしことに乱れてなむ、ただしはし願ひの所を隔たれるを思ふなむ、いと悔しき、すすむるわざせよ、と、いと定かに仰せられしを、たちまちに仕うまつるべきことのおぼえはべらねば、堪へたるに従ひて、行ひしはべる法師ばら五六人して、なにがしの念仏なむ仕うまつらせはべる。さては思ひたまへ得たることはべりて、常不軽をなむつかせはべる」

八の宮は、桐壺帝の第八皇子であり、春宮廃立運動に巻き込まれて失敗し、北の方とも死別し、宇治の山荘に引き籠もつて大君と中君の二人の姫君を育てつつ仏道修行に励み俗聖と呼ばれていた。その八の宮の成仏ために阿闍梨が行った供養が、「念仏」と「常不軽」であった。極樂往生を祈る「念仏」と共に、

「さては思ひ給へ得たること侍りて、常不軽をなむつかせ侍る」と阿闍梨は思いつき、弟子に「不軽行」を行わせたのである。

「この常不軽、そのわたりの里々、京までありきけるを、暁の風にわびて、阿闍梨のさぶらふあたりを尋ねて、中門のもの

とに居て、いと尊くつく。回向の末つ方の心ばへいとあはれなり。」

と描かれるその行法について、丸山キヨ子氏は『源氏物語の仏教』「第二篇 源氏物語における仏教の源泉となる教説についての探究 第一章 比叡山延暦寺の教説」(創文社、一九八五年、二七六頁)で、「これは常不輕菩薩が、総ての人に内在する仏性を導んで、迫害をしのびつつ、あらゆる人の前に拝礼したその行を行じさせたのである」とし、「これを「あはれ」と聞く人は、臨終の大君の枕頭に侍って、よもすがらみとり明かした薫であつた。常不輕菩薩のことは、もともと『法華經』第二十不輕菩薩品に記されているのであるが、これを「そのわたりの里々、京までありく」行法とする基を開いたのは、慈覺大師の弟子南山大師相応であつた。そうして、その本拠は、叡山東塔南谷の無動寺にあつたのである」として、『法華經』常不輕菩薩品に基づき、慈覺大師五台山巡礼に示唆を得たこの行法は、回峰行といわれ、今日も行われているところであると、『浄土院の掃除地獄』『横川の看經地獄』と共に「無動寺の回峰地獄」と称せられている。今日行われているところであると、毎日真夜中に出発して、峰々谷々にある行者道を跋涉して、数百日から千日の間、普通七里半から、大廻りの日は京都まで降りて二十一里にも及ぶ行程をめぐり歩くのである。その途中では定められた堂塔伽藍・山王七社・靈石靈水など数十個所において、それぞれ定められた修法を行って行く。……頭上には行者独特の蓮葉を形どる笠をいだいて白衣・草鞋の輕装である……」とあり、寺に居て読經して祈るものとは違う、「回峰行」の山野から京の街までひたすら歩いて經巡って行く「不輕行」の行法の独自の姿が考察されている。

「念仏」と共に行われる「不輕行」で思い出されるのが、小倉豊文氏が「ド」と「デ」——「雨ニモマケズ」と「雨ニモマケズ手帳」(『宮沢賢治』第三号、洋々社、一九八三年)に記した、浄土真宗の熱心な信仰を持つ父政次郎氏と『法華經』信仰を持った賢治が議論した場面での、政次郎氏の思い出だ。親鸞も深く敬仰したとされる平安初期の非俗非僧の念仏者に、賀古の沙弥教信がいる。「父政次郎翁が長いはげしい「法論」の間でも沙弥教信に話が及んだ時には、賢治が沈黙静思していたと言っていた」として思い起こす中で登場する念仏者教信である。

教信は、先に引用した『閑居友』上、九「あづまの方に不輕拜みける老僧の事」で紹介した「不輕行」の実践者の例として「……されば、証如聖などは、この勤めをして家ごとくに歩き給ひしぞかし」とある証如の『後拾遺往生伝』上の十七「撰津国勝尾寺証如」の中に登場する。証如が十五歳の時両親が没し、両親への報恩のため「唱礼不輕」つまり「不輕を唱礼する所

十六万七千六百余家」であったとあり、阿弥陀経も五千余巻転読し、「不軽行」で礼拝している間は暴風雷雨の日でも雨で衣が濡ることはなく礼拝する家の門戸には薰風がただよったという。その後勝尾寺に入り、無言行を二十年続けていたが、貞観八年（八六六）八月十五日夜中、柴戸の外に人が訪れ、賀古の教信と名乗り「私は今日極樂往生するが、上人あなたが来年の今夜極樂往生することを告げに来ました」と言って去ったので、弟子の勝鑑に真偽を尋ねさせたところ、賀古の駅の北に竹の庵があり、その前に死人があり犬が群れて競って食っており、庵の中には老嫗がおり、傍らに幼い童がいて共に泣き哀しんでいたので、理由を問うと、嫗は「死人は私の夫の教信です。その児は子どもです。教信はいつも念仏を唱え、近隣の者は阿弥陀丸と呼び、睦まじく三十年共に暮らし、死別して三日経ちます」と言ったと聞いて、証如も無言行をやめ念仏に転じて翌年極樂往生したとある。その「不軽行」のエピソードに関わる在俗の念仏聖である教信に、賢治は一目置いていたのである。

さらに思い出されるのは、盛岡高等農林学校（現岩手大学）で賢治と寄宿舎の同室となり同年で学年は一年後輩の保阪嘉内との出逢いと、二人で登った七月十四日、十五日の二日間の岩手山登山である。山を登りながら二人は、理想の村づくりや夢を語り合い、宗教や信仰、キリスト教や仏教、『法華経』の話にも及んだらしい。そこでは「不軽菩薩」の「不軽行」の話も出たのかもしれない。「不軽行」のように七月十四日に岩手山に登ったのは偶然の一致であろうか。

さて、ではなぜ阿闍梨は八の宮のために「不軽行」を行ったのか。

諸説ある中で、橋本治氏は『源氏供養』上巻（中央公論社、一九九三年）の三三四頁に、彼の「傲慢の罪」によると言う。氏は、三三八頁からの「五四 父という男のエゴイズム」という章で、八の宮が大君と中君を大切に育てたと言いながら家名を汚さぬために娘達に結婚するなど言い、北の方の由縁（姪）の女房中将の君との間に浮舟という娘が生まれたのに絶縁してしまったことに言及する。その上で、阿闍梨の夢に現れた八の宮の霊が「娘が気にかかって往生出来ないから助けてくれ」と告げたので、念仏を上げて、そのほかに思い当ることがあり、「人はすべて成仏の道へ至る為の師となる存在だ」と唱え道行く人すべての前に跪いて額をつけて拝む常不軽の行を弟子の僧に命じたのだという。それは、出家をしないで親王のままである限り、絶対に道行く人の前で跪くなどということはしないから「傲慢の罪」でさまよっているからだ、と言うのである。

『法華経』「常不軽菩薩品」で「不軽菩薩」が道行く人々に唱える言葉「我深敬汝等、不敢輕慢、所以者何、当得作仏」の「不敢輕慢」「敢えて輕め慢らず」の「慢」を亡くなる十日前教え子の柳原昌悦への手紙（書簡四八八、九月十一日）で、

「……しかも心持ばかり焦ってつまづいてばかりあるやうな訳です。私のかういふ惨めな失敗はたゞもう今日の時代一般の巨きな病、「慢」といふものの一支流に過つて身を加へたことに原因します。僅かばかりの才能とか、器量とか、身分とか財産とかいふものが何かじぶんのからだについてたものでもあるかと思ひ、じぶんの仕事を卑しみ、同輩を嘲けり、いまにどこからかじぶんを所謂社会の高みへ引き上げて来るものがあるやうに思ひ、空想のみ生活して却つて完全な現在の生活をば味ふこともせず、幾年かが空しく過ぎて漸くじぶんの築いてゐた蜃気楼の消えるのを見ては、たゞもう人を怒り世間を憤り従つて師友を失ひ憂悶病を得るといったやうな順序です。……」

と、「同輩を嘲り」等、賢治が自ら省みるところの「慢」、つまり自分が思ひあがつて相手をあなどる「慢心」である。

勅撰和歌集『新古今和歌集』の選者の一人でもあり、『小倉百人一首』の編者ともされる藤原定家。彼の生き方の特徴は、歌人であり貴族であることの誇りを持ち続けると同時に、自らの「慢」をも見つけ続ける人であつたことだろう。

筆者自身『明月記』の定家六十四歳の嘉禄元年（一二二五）九月十七日の記事とおぼしき六行の断簡を解説する機会に恵まれた。そこには除目と国司の任官への深い関心や不満と、長年仏道と歌道の先達として慕い訪ね「拔群之賢者」として敬愛した天台僧・前大僧正慈円の病氣見舞いのことが記され、嫡男為家の昇進への執着により子を思う道に迷う「愚父」と後に自ら省みる、俗と聖を行き来する定家の生活の一面が垣間見られた。慈円はその八日後の九月二十五日に寂に帰す。

また、この年の二月十六日には、昨年十一月から家中の次女香とおぼしき「女」や「小女等」と取り組んだ『源氏物語』五四帖の書写を終了している。定家の名歌「見渡せば……」等の和歌に「本説取り」として生かされているように、父母からも学んだ『源氏物語』は、定家の心の中に血肉化されていたのである。

定家の息男為家が撰者となつた後嵯峨院の勅撰和歌集『統後撰和歌集』が成つた翌年の建長四年（一二五二）に成立したとされる、先にあげた説話集の『十訓抄』の中の第二「嬌慢を離るべき事」つまり、驕り高ぶり、人をあなどる慢心をいましめる章に、色好みの小野小町の落魄や、呉王夫差と秦の始皇帝の驕りの後の亡びの話の後に、「不軽菩薩」の話が記されている。

「五千の上慢は仏をだにもなにともし奉らず。釈尊の法華を説き給ひし時、座を立ちて退きけり。かれら罪根深重の増上慢にして、いまだ証せざるを証せりと思ひ、いまだ得ざるを得たりと思ふ。かくのごとく失ある輩なり。委しくはかの経

に説きたり」

と『法華經』を紹介し、「不輕菩薩」の実践の姿を描く。

「不輕比丘はあへるものごとくに、

我深敬汝等、不敢輕慢

我深く汝らを敬ひ、敢へて輕慢せず

と唱へて、杖木、瓦石をもよくしのび、罵詈、放言をもとがめずして、つひにその証を得給ひぬれば、後世菩提のため、必ずおごれる心を離るべきなり」

と、出会う人毎に敬い続け、杖木、瓦石の暴力をも耐え忍び、罵詈、放言の暴言をもけつて臆らず咎めることなく悟った姿が描かれており、後世の極楽往生のためにも驕れる慢心を持つてはならないという。

また「宇治」と「不輕行」で思い出されるのが一二〇年頃成立とされる説話集『今昔物語集』巻第十九本朝付仏法にある、宇治の安日寺の僧蓮円れんえんの話である。

「僧蓮円不輕の行を修して死にたる母の苦しびを救ふ語第二十八」は、蓮円の母が邪見が深く因果の道理を理解せぬまま命を終えたので、子の蓮円は歎き悲しみ、なんとかして母の後世を弔おうと、日本国中九州の果てから奥州の際まで「不輕行」をして歩いて数年後、京都の六波羅蜜寺で法華八講を行い、宇治の安日寺に帰って見た夢で、地獄の釜の中にいた母の頭を袖に受け泣く泣く見ると、母も泣く泣く「地獄に堕ちて苦しんでいたがお前が私のために長年「不輕行」と『法華經』を講じてくれたおかげで忉利展に生まれることができた」と言うのを見て夢が覚めたという話で、「不輕行」が「母への報恩」として行われている。

定家も口遊んだと思われる流行歌謡に今様がある。平安末期、源平の争乱の中を生き抜いた後白河院によって一一八〇年頃までに編まれた歌謡集『梁塵秘抄』りやうじんひしやう巻第二「四句神歌 雑 八九首」の中に、

鵜飼はいとほしや 万劫年経る亀殺し また鵜の首を結び 現世はかくてもありぬべし 後生わが身をいかにせん(三五五)
と鵜の餌となる亀を殺し、鵜を酷使し魚を捕るという殺生戒を犯す者の来世の不安を歌う歌謡がある。また、

はかなきこの世を過ぐすとて 海山稼ぐとせしほに 万の仏に疎まれて 後生わが身をいかにせん(二四〇)

と、海で漁をし山で狩をして生活のため殺生を重ねて働く者の罪の自覚、罪人、悪人としての自覚と、死後の墮地獄の不安を歌う歌もあるこの歌謡集の中に、「不軽菩薩」を歌う歌謡もある。

「法文歌 法華經二八品 一一五首」の中の「不輕品 四首」である。

不輕^{ふきやうだいし}大士の構へには 逃るる人こそなかりけれ 誹^{そし}る縁をも縁として 終には仏に成したまふ（一四〇）

と、「あなたは必ず成仏します」という「不軽菩薩」の言葉を間違いだと誹謗する者をも、それをきつかけとし逆縁として成仏させるのだと歌う。さらに、

不輕大士ぞあはれなる ^{がたふきやうだいし}我深敬汝等と唱へつつ うち罵^{のの}り悪しき人もみな 救ひて 羅漢と成しければ（一四一）

と、「不軽菩薩は実に尊い、「私はあなたを心から敬います」と唱えながら、菩薩を罵る悪人も皆救つてしまうのだから」と歌われている。

先に論を引用した廣田氏も、「衆人に罵られ打擲されてもそれを逆縁として彼らを仏道に導いたという不軽菩薩の忍辱の心はほん品の核心であり、そのようにうけとめられていた」例としてこの二首をあげている。

一〇 能の作者世阿弥、禅竹と『法華經』

能の「鵜飼」では、鵜飼（鵜使い）に殺生の罪の自覚はあるものの、鵜飼に寄り添い供養する日蓮とおぼしきワキの旅の僧との対話の中で、僧に、

「さらば罪障懺悔に。業力の鵜を使うて御見せ候へ。跡をば懇に弔らひ申し候ふべし。」
と言われ、

「あら有り難や候ふ。さらば業力の鵜を使うて御目につかけ候ふべし。跡を弔^うて賜はり候へ。」
と言ひ、僧に「心得申し候ふ。」と言われて、鵜飼のあるがままの姿を嬉々として再現して見せて、

「……隙なく魚を食ふ得は。罪も報いも後の世も。忘れはて、おもしろや。」
と喜び、遂には成仏するのである。

能「鵜飼」の作者であり、室町時代において歌舞劇である能を完成させたとされる世阿弥。彼は能楽論である『風姿花伝』

の「奥義云」で、「芸能とは、諸人の心を和らげて、上下の感をなさむ事、寿福増長の基、もとひ退齡延年かれいの方なるべし。…〔中略〕…この芸とは、衆人愛敬を以て、一座建立の寿福とせり。……」と、芸能の意義をあらゆる人々を感動させて幸福を増し寿命を延ばす事であると言う。そして、『法華經』の「觀世音菩薩普門品」にある「觀世音菩薩を禮拜供養すれば、女兒を産むことを望む時には前世で功德を積んだ〔衆人愛敬〕の「あらゆる人に愛される」兒を産む事が出来るでしょう」とあるその「衆人愛敬」を引用し、「あらゆる人に愛される芸」を目指す事を宣言した。それはあらゆる人に愛されるために、あらゆる身分や宗派を越えて、あらゆる人を思いやり敬うことである。

世阿弥は父観阿弥と同じく阿弥号を名乗りつつ、時宗を信仰しているわけではなく、奈良にある曹洞宗の補巖寺から至翁禪門として過去帳が見つかり参禅していたらしいが、直接の信仰は語っていない。

また世阿弥の娘婿で、能の伝書を伝えられ芸風を継いだとされる金春こんばる禪竹は『稲荷山參籠記』に「禪竹、若年ノ時ヨリ、歆喜天ヲ帰依ノ心甚深也」と若年からの現世利益の男女和合の仏神である歆喜天かんぎてん（聖天）の信仰を告白しているが、能の作品に歆喜天が直接描かれたものは残されていない。

筆者の考察した例として、式子内親王の墓の石塔に定家の執心が葛となつて纏い付く、二人の身分を越えた悲恋を描く能「定家」の舞台が、京都千本であり、室町時代の古本に「此の歆喜寺に住み給ひしを」とあることから、当時男女和合を祈る歆喜天が祀られた現在の雨宝院という寺のある場所であつたことが明らかとなつたが、「本説」として二人の悲恋の舞台としてふさわしいからであつて、直接歆喜天信仰を教化しようとするものではないと言えよう。しかしその禪竹は『明宿集』で、能の根源としての翁の、諸仏諸神や『法華經』廿八品との一体を説く。歆喜天も阿弥陀仏も『法華經』もすべて翁と一体であるとし、『作善日記』には、

アリガタキカナ哉、今日ヨリ我身真如ナリト知りヌレバ、惡業煩惱モサハリナラズ、名聞利養ハ、返テ仏果菩提ノ資糧トナリ、破戒無慙、懈怠懈墮ヲモ嫌ワズ、往生ノ障リト思フベカラズ。万法真如ノ理ナレバ、煩惱業苦ノ三道ハ、カエテ仏ノ法身、般若解脱ノ三徳ナリ。

とあり、その本有本覚思想により、惡業煩惱の自覚を経て、真如すなわち、ありのままの我が身の仏性を実感し歆喜している。禪竹作の能「定家」でも、定家の身分を越えた許されぬ恋の妄執の葛に這い纏われて苦しむ式子内親王の亡霊は、旅僧に「法

華経』による供養を頼みつつも、

「帰るは葛の葉の、もとのごとく。這ひ纏はるるや、定家葛、這ひ纏わるるや、定家葛の、はかなくも、形は埋もれて、失せにけり。」

と、もとの如く定家葛に這ひ纏われて消えてゆく。歓喜天は直接出てこないが、歓喜天が象頭の男神と女神が抱き合い歓喜する姿であるように式子内親王の霊は定家葛に抱かれて消えてゆく。その恋の妄執のあるがままの姿を、能は歌舞により舞台で花として結晶化し、観客はその姿に感動するのである。

賢治の《文語詩稿 一百篇》の中の〔翁面 おもてとなして世経るなど〕に、

翁面、おもてとなして世経るなど、ひとをあざみしそのひまに、

やみほ、けたれつかれたれ、われは三十ちをなかなばにて、
緊那羅きんなろ面とはなりにけらしな。

とある。三十歳半ばは、三十七歳で亡くなる賢治の晩年の作である。

「翁面のように笑顔で世を過あぎてきたけれど、人を「慢心」で嘲笑あざけりおごり高ぶってきたその間に、病み衰え疲れてしまったが、私は三十歳半ばとなってようやく、

仏法守護の八部衆の一人歌舞音曲の芸能神である緊那羅のように文芸を使命とするようになったのだなあ」と、『百人一首』二番歌、持統天皇作「春過ぎて夏来にけらし……」の「けらし」を使い、今までの慢心を省み、病となり疲れ果てたが三十半ばとなって、ついに文芸を使命として「法華文学」に取り組めるようになった思いの結晶化とりたい。亡

くなる十日前の手紙に「けれども咳のないときはとにかく人並みに机に座って切れ切れながら七八時間は何かしてゐられるやうになりました」と咳に苦しみつつも亡くなるまで机に向かい「吾事」の文学を書き続けたことがうかがえる。

『雨ニモマケズ手帳』一三九・一四〇頁で、

「筆ヲトルヤマツ道場観 奉請ヲ行ヒ所縁 仏意ニ契フヲ念ジ 然ル後ニ全力之ニ従フベシ

断ジテ 教化ノ考タルベカラズ！ タゞ純真ニ 法楽スベシ。タノム所オノレガ小才ニ非レ。

タゞ諸仏菩薩 ノ冥助ニヨレ。」

と紫の色鉛筆で記されている。「決して他人を教え導いてやろうなどという「慢心」を持って筆を執るのではない！ただ純真に法樂するのだ」との決意だ。

この文の前の頁である一三七・一三八頁には、

「何故に 砕きし骨の なごりぞと おもへば袖に 玉ぞ散りける 元政上人」

と、江戸時代の日蓮宗の僧・元政上人が母を伴い身延山の日蓮上人御骨堂に参り拝んだ時の歌がある。元政上人は父母を大切に敬った僧としても有名で、その後の左の頁に、

「法界禮一拜 ^{スルナリ} 法界^ッ」

住 忍辱 地」

と赤鉛筆で記され、さらに青鉛筆で同じ「住 忍辱 地」と記されている。これは、忍辱の地に住み、つまり「苦難や迫害に耐えて安らかな心を持ち、自分を迫害する者も法界で自分も法界ゆえに、同じ法界の成仏する者として礼拝する」という意味で、同じ『雨ニモマケズ手帳』にある先に引用した一二二頁から一二四頁に記された「不輕菩薩」の詩の次の内容と重なる。

「あるひは瓦石さてはまた／刀杖もつて追れども／見よその四衆／に具はれる／仏性なべて拝をなす／不輕菩薩／菩薩四の衆を礼すれば／衆はいかりて罵るや／この無智の比丘いづちより／来りてわれを礼するや／我にもあらず／衆ならず／法界にこそ立ちまして／たゞ法界ぞ法界を礼すと拝をなし給ふ」

の法界である。

初めにも紹介した、昭和五年（一九三〇）三月十日の、国民高等学校で受講した伊藤忠一宛の手紙で、賢治が紹介した『法華經』の本である山川智応の『和譯法華經』に、この元政上人の歌が「法華經和歌百首」の中の一首として上げられている。

「法師功德品 此人有思惟籌量言說皆是佛法

元政上人

世の人をわたしわたさずおもふことかたるも法の舟ならぬかは廿八品歌

不輕品

前大僧正道昭

冬がれの梢は何かあだならむ枝にぞこもる花も紅葉も續後拾

而打擲之避走遠往

覺雅法師

有りがたき法をひろめし聖にぞ打みし人もみちびかれぬ金衆

後嵯峨院御製

あはれなりうきもつらきも知りながらたへ忍びける人の心は法文

この「法師功德品」の題の元政上人の歌の後に、「不輕品」の題で、すべての人の仏性を信じて迫害に耐える「不輕菩薩」を詠んだ歌が続くのである。賢治は、元政上人の歌と共にこれらの「不輕菩薩」を詠んだ歌も読んだであろう。

同じく先に蔵書として紹介した「統帝国文庫」第四十九編「佛教各宗 續高僧實傳」の「不輕菩薩」に言及した『西行物語』の四つ後に、『深草元政上人御傳記』がある。元政上人が、母を興に乗せて氣遣いつつ、富士を眺め日蓮上人の身延山に参った折の記録で、先の『雨ニモマケズ手帳』の御骨堂での「何故に……」の歌も記されており、途中の龍口の向かいの江ノ島では「漁人の家おほくて、ところせくいを、ほしおきたれば、人みな鼻おほひてすぐる」と、一面に捕った魚を干す漁師の生活等も詳しく描いたこの元政上人の記録も、賢治は読んだと思われる。鵜飼と同じ魚捕る漁師の生活を。

また、世阿弥が、応永二十九年（一四二二）六十歳の時に申楽（能）について語った芸談を次男元能が記したとされる『世子六十以後申楽談儀』、通称『申楽談儀』に次の言葉がある。

コノ道ハ、礼楽ニトラバ楽也。人ノ中ヲニツコトナスベシ。

つまり、「能」とは、『論語』に言う社会に必要な「礼楽」のうち、秩序を守る礼儀である「礼」か、人の心を豊かにする音楽芸能である「楽」かと言えば、「楽」である。だから、観客である「衆人」、あらゆる人々の心を思いやり感動する芸をして、人々がにつこり笑顔になるものなんだ」と言っている。まさに「面白や」である。

この『申楽談儀』に、「又、鵜飼、柏崎などは、榎並の左衛門五郎作也。さりながら、いづれも、悪き所をば除き、よきことを入れられければ、皆、世子の作なるべし」とあり、世阿弥により能「鵜飼」の「面白や」の部分が改作されたことがうかがわれる。

松尾芭蕉の俳諧紀行文『おくの細道』（元禄七年（一六九四）以前成立）の旅は、謡曲「殺生石」や謡曲「遊行柳」、謡曲「実盛」等が引用されるように、能に登場するワキの「諸国一見の僧」の旅に見立てているとされている。そのように能への

造詣が深い芭蕉が貞享五年（一六八八）六月、岐阜滞在中に「長良川の鵜飼」を見て詠んだ句が、

おもしろうてやがて悲しき鵜飼哉うづねな

である。能「鵜飼」の前場の見せ場である「鵜の段」の独吟や仕舞の詞章である謡曲の文句が活用されている。「鵜の段」最後の詞章「鵜舟の簀影消えて。闇路に帰るこの身の名残惜しさを。いかにせん」を踏まえた俳文のあと、「罪も報ひも後の世も忘れ果てて面白や」や「不思議やな篝火の燃えても影の暗くなるハ。思ひ出でたり月になりぬる悲しさよ」を踏まえており、「悲しき」は、罪業ゆえの悲しみを前提としつつも、あるがままの姿を生き生きと再現した鵜飼の面白さの名残ゆえの悲しさとりたいたい。

賢治も、童話「毒もみのすきな署長さん」を、「法華文学」として教化するためというよりも、「不軽菩薩」のように、あるがままに「毒もみ漁」を最期まで「面白い」と感動して生きる署長さんを、「みんなはすっかり感服しました。」と記して、あるがままに生きて同じ仏と成る人として、心から敬い法樂して大切にその生涯を描いたのではないか。

能「鵜飼」で地獄の鵜使いを供養して成仏させる日蓮とおぼしきワキの旅僧は、童話「毒もみの好きな署長さん」の語り手と重なると考えたい。

一一 賢治の童話の中の「毒もみ」

童話「さいかち淵」の冒頭はこう始まる。

八月十三日

さいかち淵なら、ほんたうにおもしろい。

しゅっこだって毎日行く。……

とあり、「ぼく」は「しゅっこ」と一番仲がいい。その「ぼくら」がさいかち淵で泳いでみると、

発破をかけに、大人も来るからおもしろい。

と言う。その「しゅっこ」が、

八月十四日

しゅつこは、今日は毒もみの丹礬^{たんぱん}をもつて来た。あのトラホームの眼のふちを擦る青い石だ。あれを五かけ、紙に包んで持って来て、ぼくをさそった。巡査に押へられるよと云つたら、田から流れて来たと云へばいいと云った。けれども毒もみは卑怯だから、ぼくは厭だと答へたら、しゅつこは少し顔いろを変へて、卑怯でないよ、みみずなんかで、だまして取るよりいゝと云つて、あとはあんまり、ぼくとは口を利かなかった。……

とあり、同じく童話「風の又三郎」では、「九月八日」の場面で、

「何だ。何だ。」とすぐみんな走って行つてのぞき込みました。すると佐太郎は袖でそれをかくすやうにして急いで学校の裏の岩穴のところへ行きました。みんなはいよいよあとを追って行きました。一郎がそれをのぞくと思はず顔いろを変へました。それは魚の毒もみにつかふ山椒の粉で、それを使ふと発破と同じやうに巡査に押さへられるのです。ところが佐太郎はそれを岩穴の横の萱の中へかくして、知らない顔をして運動場へ帰りました。

そこでみんなはひそひそ時間になるまでひそひそその話ばかりしてゐました。

その日も十時ごろからやつぱり昨日のやうに暑くなりました。みんなはもう授業の済むのばかり待つてゐました。二時になつて五時間目が終ると、もうみんな一目散に飛びだしました。佐太郎も又そつと袖でかくして耕助だのみんなに囲まれて河原へ行きました。……（中略）……みんな急いで着物をぬいで、淵の岸に立つと、佐太郎が一郎の顔を見ながら云ひました。

「ちゃんと一列にならべ。いいか。魚浮いて来たら、泳いで行つてとれ。とつた位与^やるぞ。いいか。」

小さなこどもらは、よろこんで顔を赤くして、押しあつたりしながら、ぞろつと淵を囲みました。ベ吉だの三四人は、もう泳いで、さいかちの木の下まで行つて待つてゐました。

佐太郎、大威張りで、上流^{かみ}の瀬に行つて箆をちやぶちやぶ水で洗いました。みんなしいんとして、水をみつめて立つてゐました。

とあるように、子ども達にとつて「毒もみ」は大人達の「発破」と同じように、巡査に捕まるとは言いながら、地域の生活において身近で楽しみな、夢中になれる「面白い」魚捕りの習俗として描かれている。

一一 賢治の「不輕菩薩」と日蓮の「不輕菩薩」

日蓮の「不輕菩薩」がどのように表現されているかを『日蓮上人全集』（全七巻、春秋社、一九九三年）で見てもよい。

例えば『清澄寺大衆中』（第五巻、二八三頁）では、諸宗の誤っていることと、『法華経』の優れていることを、二十余年間説き続けて来たために受けた苦難を回想して、「昔は聞く不輕菩薩の杖木等を。今は見る日蓮が刀剣に当る事を」と、昔に「不輕菩薩」が杖木で打たれたことと、今の日蓮が刀剣の難にあっていることが重なることを対句表現で印象的に表現しているように、その多くが『法華経』を弘めるために苦難を受けた点に焦点を当てて、その具体例として引用されているようだ。仏道教化の二つに、長所を尊重して導く「摂受」と、非を強く責めて導く「折伏」がある。

賢治は、「不輕」の名のごとく、「不敢輕慢」つまり、「私は慢心であなたを軽しめることは致しません、あなたを仏と成る人として敬います」と、会う人一人一人を敬い続ける「摂受」を大切にしようとしたようだ。

一方日蓮は、「真言は国をほろぼす・念仏は無間地獄・禪は天魔の所為・律宗は国賊」（『諫曉八幡抄』第一巻、四二頁、等）といういわゆる「四箇格言」の「折伏」で厳しい他宗批判の言葉を敢えて言う。なぜなら「ただ妙法蓮華経の七字五字を日本国の一切衆生の口に入れんとはげむ計りなり。これすなわち母の赤子の口に乳を入れんとはげむ慈悲なり」（四〇九頁）と母親が赤ちゃんにお乳を飲ませようと一心になるのと同じ慈悲の心の表れなのだと言い、それ故に「ただ不輕のごとく大難には値ふとも、流布せん事疑ひなかるべきに、真言・禪・念仏者等の譏妄に依りて、無智の国主等留難をなす」と、「不輕菩薩」が『法華経』を伝えようとして迫害されたように、他宗派の譏妄によって権力者が日蓮を迫害するのだと言う。

日蓮は、「本有本覚思想」ともいえる、あらゆる人があるがままで成仏できる人として敬うという、もう一つの大切な「不輕菩薩」の実践のように、なぜ他宗派の人々を敬わなかったのだろうか。

それは、『頼基陳状』（第五巻、一七二頁）で、「悪法を以て人を地獄にをとさん邪師をみながら、責め顯はさずば返て仏法の中の怨なるべしと、仏の御いましめのがれがたき上、聴聞の上下皆惡道にをち給はん事不便に覺へば申し候也」と、自分こそが悟っていると思ひ込んでいる「増上慢」の僧や在俗の信者達を折伏し、まず気づかせて救いたいという信念によるものである。しかし、他宗から見ればそれこそが「増上慢」ととらえられるであろう。

松岡幹夫氏は、『法華經の社会哲学』（論創社、二〇一〇年）で、浄土宗の法然の「排他主義」について言及した中で、「日本の仏教界では、日蓮を攻撃的な排他主義者などと批判する声もあります。しかし真相は逆であり、日蓮は寛容の精神を掲げて排他主義者と戦ったのです。日蓮の実像は、戦う寛容主義者でした。一方で法然は、念仏以外の教えを「聖道」と見なしながら、それでも捨てようと言うのですから、こちらは真正の排他主義者だったと考えざるをえません。日蓮の時代の念仏宗は、表面上融和的になって権力の側に食い込んでいましたが、日蓮はその奥に潜む排他性の牙を白日の下にさらし、厳しく糾弾したのです」と言う。さらに松岡氏は『宮沢賢治と法華經』（論創社、二〇一五年、二一七頁、二三七―二三八頁）で、賢治の文語詩「不輕菩薩」の「（こゝにわれなくかれもなし たゞ一乗の法界ぞ 法界をこそ拜すれと 菩薩は礼をなし給ふ）」を用い、「不輕の礼拝行は、衆生一人一人に内在する仏性を礼拝する修行なのであり、それゆえに個としての人間を絶対に軽んじないという意志を秘めたものだったといえる」が、「賢治の不輕菩薩理解は、個としての人間を絶対者の影とみる立場を取り、礼拝行における根源的な主体者や対象を「一乗の法界」とするのである」として、法然の弟子親鸞の浄土真宗の強信者であった父・政次郎の肯定的自己卑下の精神性を継承し他力救済を待ち望む「個」としての人間の意志を否定する考えが賢治の思想中に根づいていたからであろう」と言う。

しかし、同じ賢治の「法界」を、丹治昭義氏は『宗教詩人 宮沢賢治』（中公新書、一九九六年、二〇八頁）で、「法界という思想は『法華經』そのものにはない」とことわりつつ、「法界は仏の本当の姿である法身を意味する。つまり人間の真実の姿であり」「もう個別的な実体としての「われ」とか「彼」という区別はない。不二、平等の世界である」が、「本当の不二の平等は自他が「一者」であるということではな」くて、「両者が本当に仏と仏として出会うことである。その出会いが礼拝だというのである」として、「個としての人間の意志を否定している」とはとっていない。筆者もそれに同意する者である。

また賢治が薦めた智学の序の『和譯法華經』の山川智應による「法華經大意」（一二六頁）にも、

「彼等分立の各宗が、佛教の大王經たる法華經を離れて獨立し、却て法華を下す叛逆的宗義を征伐するに、或は一國二王にひとしき亡国の宗（眞言宗）と責め、或は自の主師親を捨て、他人の主師親に依る二十逆罪無間の業（念佛宗）と呵し、或は萬善聖智なる君父の教誡を無して、自心を規とする上慢天魔の徒（禪宗）と喝し、或は寶器を亡ひて瓦礫を貴ぶ國賊の輩（小乗律宗）と破し、之を總じて誹謗正法の宗とし、諸宗無得道墮地獄の根源、法華獨一の成佛と大呼し、而強毒之

不輕弘通、杖木瓦石をもとせず、勸持色讚、不惜身命、流罪死罪をおそれず、我れはこれ末法の大導師、本化の上首上行なり」

と、各宗を批判し「不輕菩薩」のようにその反発に耐える日蓮の決意を伝える。しかし、今成元昭氏は、『法華経・宮澤賢治』（法蔵館、二〇一五年）で、「賢治の心をとらえた不輕菩薩とは、田中智学が理想として掲げる折伏者像とは全く異なる」とし、賢治の熟読した智学の『本化攝折論』の「折伏」でなく「摂受」をとったとする。

賢治は、盛岡高等農林学校時代の親友の保阪嘉内をなんとか『法華経』信仰させようと折伏した頃と比べて変化し、晩年の「雨ニモマケズ」を書く頃までには、不輕菩薩的な価値観は、日蓮のより多く注目した受難と折伏の部分よりも、より一層、『源氏物語』『西行物語』や『閑居友』、定家の「不輕行」等の古典文学や説話・物語等で伝えられてきた、世俗的な『法華経』と「念仏」を同時に行う教信など念仏聖に近い、まず相手を敬う生き方に共感し大切にしていたようである。

江戸時代、『法華経』を持ち歩き「子どもらと手まりつきつつ 霞立つ 永き春日を 暮らしつるかも」と、托鉢に出かけた村里の子どもらと共に遊び手まり歌を歌い手まりをついた禅僧良寛。

彼は歌に「僧はただ 万事はいらず 常不輕 菩薩の行ぞ 殊勝なりける」と詠み、詩に「朝行礼拝暮礼拝 但行礼拝送此身 南無帰命常不輕 天上天下唯一人」と吟じて、あらゆる人をあらゆる時に礼拝した「不輕菩薩」をひたすら尊敬し理想とした。同時に「草の庵に 寝ても覚めても 申すこと 南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏」「良寛に 辞世あるかと 人間はば 南無阿弥陀仏と 言ふと答へよ」と念仏を詠むように、「不輕菩薩」と「念仏」を共に尊んでいる。「念仏」を唱えぬまでも、賢治は同じ『法華経』を尊ぶ良寛のような、あらゆる人に寄り添い尊ぶ心であろうとしたのではないか。

一三 鶉かわうそと川瀬かわうそと、童話「毒もみのすきな署長さん」と能、そして能面

童話「毒もみのすきな署長さん」の、主人公の署長さんは次のように登場する。

「ある夏、この町の警察へ、新しい署長さんが来ました。」

この人は、どこか川瀬かわうそに似てゐました。赤ひげがびんとはねて、齒はみんな銀の入れ齒でした。署長さんは立派な金のモールのついた、長い赤いマントを着て、毎日ていねいに町をみまはりました。

驢馬が頭を下げてると荷物があんまり重すぎないかと驢馬追ひにたづねましたし家の中で赤ん坊があんまり泣いてゐると抱瘡はきそうの呪まじなひを早くしないといけないとお母さんに教へました。」

とあり、物言わぬ動物や赤ん坊の立場を思いやる発言をしている。そして毒もみをしたことを子ども達に知られて評判となり、ブハラブハラの町長さんと会った時、

「二人が一緒に応接室の椅子にこしかけたとき、署長さんの黄金きんいろの眼は、どこかずうつと遠くの方を見てゐました。」とあって、署長さんの外見は、「川獺かわぬに似ていて、齒は銀の総入れ歯で、黄金色の眼」であると言う。

ベルトルト・ラウファールの『鵜飼——中国と日本』（小林清市訳、博品社、一九九六年）には、揚子江の上流域で現在もカワウソ漁が行われていて、鵜飼との関係を考察し、カワウソ漁は鵜飼よりも古く唐代には既に知られており、鵜飼は十世紀初めに揚子江下流域で始められたもので、両者の相互関係を考える必要はほとんどなく、鵜飼が次第に家畜化されたのに比べ、川獺はただ人に馴れただけであって、あいかわらず野生の状態をとどめていたとするが、人間に漁のために飼われた鵜と川獺の、魚を好んで巧みに魚を捕らえる、生まれながらの性さがの共通点を伝える資料と言えよう。

さて、賢治の作品で、「黄金色の眼」は九例あるとされ、山男が五例、他は「茨海小学校」の狐の校長、「水仙月の四日」の雪婆ゆきばあんご、「家長制度」の女を殴る家長と、この「毒もみの好きな署長さん」の署長さんであると言う。

大島丈志氏は「呪術的世界に生きた「毒もみの好きな署長さん」に関する考察」（『闇のファンタジー』青弓社、二〇一〇年）で、「黄金の眼の色」のイメージをまとめて、佐野紀子氏は「賢治から見ると善良な愛すべき人物であり」「非凡な尊さを表出した」ものでありそんな署長さんを「自分の職務を果たしながらどうしても毒もみだけはやめられないと言う言うなれば非常に一途で純粹なデクノボー的要素を持った人物」とし、大塚常樹氏は「諸菩薩の〈三十二相〉の幾つかが備わった、より成仏の可能性の高い存在であることを暗示」していること等をふまえた上で、高貴なものの象徴だけでなく、女を殴る家長や、死をもたらす雪婆ゆきばあんごのように、「高貴というよりは、むしろ異なる世界の住人の象徴とした方が妥当ではないだろうか」と言う。

ではここで、能に使われる能面に注目してみよう。眼や口に黄金色の金具を入れたものが多くあるからである。

中村保雄氏の『能面——その美・形・用』（河原書店、一九九六年）を参考にあげてゆこう。

神霊や鬼に相当するものでは、「阿吽」の「阿」に当たる眼を見開き口をかつと開けた「大飛出系」の面と、「吽」にあたる「癡見系」の眉を擧め目を見張り口をへの字に強く閉じて圧口をした面に分けられ、いずれも眼に金色の金属の金具がはめ込まれ、大飛出の歯は金具が入っている。悪尉という面も「悪」は猛々しく強く恐ろしい意味を持ち、眼に金具を入れ大きな鼻と荒々しい鬚を持つ鬼神系の面である。「獅嚙（獅噛）」は獅子がものを噛む状態を示し眼に大きな金具が入り強く怒った表情となつて能「羅生門」の鬼などを表す。

本来修羅道の苦しみを表す武将の亡霊の中でも歴戦の勇者の壮烈な戦いの様を表すのに用いる「平太」にも眼に金具が入る。能「高砂」など神そのものを表す面には、稜のたつた目に小さな金具の入った「三日月」や、すがすがしい「神体」があり、眼にはしっかり金具が入る。

女性の面でも「泥眼」は、能「海人」などで女人成仏の龍女をイメージし、眼に金泥を施し、貴族の夫人や女神を表す。

能「山姥」の山姥はまさに「雪婆んご」と同じ鬼女ではあるが山や自然の精霊でもあり、その超自然的な存在を眼に金具を入れて表現する。

童話「毒もみのすきな署長さん」の黄金色の眼も、魚を捕るのが大好きな川獺の化身としての精霊や土地神のような能面のイメージと重なるようだ。

そして、漁夫や漁師が殺生の罪で地獄におち、地獄の呵責に苦しみ憔悴しきつた表情を表すのが「瘦男」である。能「鵜飼」の鵜使いと同じく、伊勢の国の禁漁区で魚を捕り海に沈められて旅僧（又は九州の旅の男）に供養を求め『法華経』で弔われつつ網に魚を追いつく様を表すうちに、地獄で苦しむ姿を表し助けを求めて波に沈む能「阿漕」の漁師や、鳥の善知鳥を捕って地獄に落ち旅僧に妻子による供養を言伝て地獄で苦しむ様を表し僧に助けを求めて消える能「善知鳥」の狐師がこの面を着ける。頬がこけ眼窩は落ちくぼんでいるが、眼には金具が入っていて亡霊としての超自然的存在を表している。

能「鵜飼」の鵜使いの漁師も、本来は「瘦男」の面で地獄での苦しみを表すのだろうが、賢治の当時、日蓮とされたワキの旅僧によって『法華経』で供養されるシテの漁師の亡霊の面は、金具の入った超自然的な面ではなく、長年汗を流して仕事をし年齢を重ねてきた老人の渋い表情の「尉」の面である。

しかも「笑尉わらいじょう」と呼ばれ、まさに「笑っている尉」の意味の面で演じられ、中村氏によると「ひげ鬚が上唇・下唇・顎あごの」三段の植え毛に上下のたくましい齒列が見え、その口もと眼もとに見られるように、微笑の度合いが尉面の中では一番きわだっているのです。…《中略》…現在でも、片田舎の老人の中に見出せそうな表情です」とあり、世阿弥の「申楽談儀」には「恋の重荷の面とて名譽せし笑尉は、夜叉が作也」とある能「恋の重荷」で、「恋は上下を分かぬ慣らひ」と天皇の後の女御に、菊を世話する山科の莊司という庭師職人の老人が身分違いの恋をする、その老人の恋する笑顔であり、「鵜飼」の老漁師が笑顔で「面白や」と言うのにふさわしい面と言えよう。

そこには、他の二曲とは違う、あるがままに生きる姿を肯定する能「鵜飼」の、ひいては改作後の作者である世阿弥の独自の価値観が表れていると言えよう。

伊藤博之氏は「鵜飼」（日本文学、一九七四年十一月）で、能「鵜飼」の舞台空間が、石和川の「上下三里が間の堅く殺生禁断の所」に設定された事に注目し、「そも／＼漁獵行為は殺生禁断の地でなくても忌むべき殺生業として正統社会から疎外されていたのである。科とがの中の殺生」である鵜使いをさらに「堅く殺生禁断の所」で行おうとすることは、二重の罪悪なのである。この鵜使いを中世的な倫理に照らすなら悪の上にさらに悪を重ねる極悪人であるが、「若年よりこの業にて命を継」いできたろう漁夫の立場からは、社会から二重の疎外を受けたことではない」と言う。さらに殺生禁断の地を設ける運動が律宗中興の師叔尊と忍性によって進められ、日蓮と衝突して律宗国賊論が出た時代的な背景があるだろうと言う。そして「律宗の僧侶が莊官や名主層の在地権力と結びつき、自己及び支配者の作善にかえるために殺生禁断の禁制を一方的に強行することは、漁撈をもって生業としてきた人達の生活権を奪うことでしかなかったのである。権力が一方的に強行した禁制に対しては当然に庶民の反抗を招いたであらうし、「鵜飼」や「阿漕」のシテのような密漁者を生んだに違いない」として、日蓮の面影をかりた「世俗の価値理念を離脱した」「やつれ果てぬる旅姿」のワキの僧だからこそ、シテの漁師の「生きた具体的な生活意識の宿る喜びや面白さや、生き生きとした行為の手ごたえ」がある鵜使いに執着する「人の業」の深みに人の視線を導いてくれるのだと、この曲の魅力をまとめている。そして、武士などの権力者の都合や観念による禁漁区の設定や殺生禁断の法によって、鵜飼をする漁師の生活が圧迫され弾圧されることの不当性と、生活者としての鵜飼の漁師に寄り添うワキの旅の僧の視点の尊さを訴えている。

能「鵜飼」の中の当時日蓮として共有されたワキの旅の僧も又、シテの漁師の立場に寄り添い、心を込めて『法華経』の供養をする。そこに漁師の霊が現れて「面白や」と鵜飼の姿を舞台に再現して見せてくれるのである。

その日蓮は、漁師の子と伝えられている。

賢治が生きた大正時代の国の法律では、「密造酒」も「毒もみ」も禁じられていた。賢治の童話「税務署長の冒険」でも、村ぐるみの密造酒が摘発されるが、自家製の「どぶろく造り」は、本来東北の人々の昔からの生活の中の食文化であった。そして童話「毒もみのすきな署長さん」の「毒もみ」も、大人から子どもまで熱中する昔からの漁の文化であった。いずれも「面白や」と夢中になって楽しめる、その土地の地域の独自の風土から生まれた血の通った文化であり生活そのものであった。そして、賢治の故郷岩手県で土地の守り神として演じ続けられる鬼剣舞の鬼の面の白目の部分も、やはり黄金色である。

童話「毒もみのすきな署長さん」の子ども達が、署長さんの毒もみをしている証拠を出し合い、「さうだ。さうだ。きつとさうだ。」と確信を持ち、

「……たうとう小さな子供らまでが、巡査を見ると、わざと遠くへ遁けて行つて、

「毒もみ巡査、なまづはよこせ。」なんて、力いっぱいからだまで曲げて叫んだりするもんですから、

……〈中略〉……

「もうおわかりですか。」

「よくわかってます。実は毒もみは私ですがね。」……」

という、おそらく署長さんと一緒に巡査達も毒もみをしただろうことを暗示し、署長さんの告白を呼び起こす小さな子供達の一生懸命の呼びかけの姿は、『和譯法華経』『妙法蓮華経常不輕菩薩品第二十（五四八頁、五四九頁）』にある「不輕菩薩」の次の姿を思い起こさせる。

……常に罵詈^{ののしり}を被れども嗔恚を生さず。常に此の言を作しぬ、汝當に佛と作るべしと。是の語を説く時、衆人或は杖木瓦石などを以て、而ち之を打擲けば、避け走り遠く住りて、猶は高聲く唱へて言はく、我敢て汝等を輕しめず、汝等皆當に佛と作るべしと。其の常に是の語を作すを以ての故に、……

とある、「不輕菩薩」が刀杖瓦石に遭いつつ、わざと遠くへ走って避けて大声で唱える姿と重なるようだ。さらに、

『雨ニモマケズ手帳』の「土偶坊」第三景の、

「土偶ノ坊 石ヲ

投ゲラレテ遁ゲル」

の「遁ゲル」と、童話「毒もみのすきな署長さん」の「小さな子供ら」の「わざと遠くへ遁げて行つて」の「遁げ」が、同じ「遁走」の「遁」を使っているのも偶然ではないのか。

「ただ法界を法界を礼すと拜をなし給ふ」として、告発する子ども達も、告発され堂々と告白する署長さんも、共に「不輕菩薩」の言う、同じ仏性を持った法界の、一人一人として賢治は大切にみつめ描いているのではないか。

終わりに

作家中上健次は、亡くなる数年前、東京学芸大学での講演で、「文学は全ての悪を正当化する」と言った。それは言い訳やごまかしでなく全ての人の価値を認め、紀州熊野の路地や自然風土の中で生きる人々一人一人の差別や偏見善悪を越えた生きることそのものの尊さいとしさを描こうとする宣言であった。そこには文芸文学を「吾事」とする紫式部にも藤原定家にも世阿弥、禅竹にも、そして宮沢賢治にも通じる、「不輕菩薩」と同じ、人間一人一人への愛情と信念が現れている言葉と言えよう。

そして「今」を生きる我々も、同じ「一人の作者」として、一人一人を大事に見つめ、この世にあるがままに生きる喜び「面白さ」を言葉に、文字に、そして文学に、生きるあかしの一文字一文字として結晶化してゆきたい。

註

- (1) 宮沢賢治の作品の引用は以下すべて『宮沢賢治全集』（ちくま文庫）によることとする。
- (2) 奥田弘「宮沢賢治の読んだ本 所蔵図書目録補訂」『宮沢賢治研究資料探索』、蒼丘書林、二〇〇一年）今までの賢治の蔵書資料研究をまとめたもので、以下賢治の蔵書はこの資料を基本資料とする。
- (3) 大和田建樹編『謡曲通解』（博文館、明治三十五年（一八九二））
- (4) 山川智応著『和譯法華經』（新潮社、一九二二年）。附録として法華經大意・本文索引・脚註索引・文學索引・法華經百首が載っている。

る。国民高等学校の受講生であった伊藤忠一宛の昭和五年（一九三〇）三月十日の手紙に「次に法華經の本は」として紹介されている。忠一の住所、花巻町下根子は賢治がかつて住んで活動していた羅須地人協会の隣りの農家である。

- (5) 上田哲「賢治研究ノオト拔書」（日進主義研究）4、一九七八年、「田中智学と国柱会と文芸運動」（日進主義研究）7、一九八二年。智学発刊の明治三十九年（一九〇六）六月十日付「妙宗」に、坪内逍遙が「宗教と演劇」の題で、仏教家が「能楽（能）」を地盤として一種の新楽劇を興し、オラトリア（イタリヤの宗教音楽劇）に擬して新しい能楽を興して、能という古典劇を止揚して新しい日本の近代演劇を構築しようと提言し、智学もその影響を受けたとする説が注目される。

- (6) 「續帝國文庫」『佛教各宗續高僧實傳』第四十九編『西行物語』（博文館、明治三十六年（一九〇三））「宮沢賢治の読んだ本」では明治二十六年となっていたが、「續」のこの本は明治三十六年である。

- (7) 「閑居友」は続群書類従完成会により大正十三年（一九二四）八月十五日に発行された『續群書類従』巻第九五四、雑部一〇四に入っており、賢治が童話「毒もみのすきな署長さん」を執筆したとされる時期とも重なる。

盛岡市にある岩手県立図書館に問い合わせたところ、県立図書館の蔵書は昭和六年に印刷されたもので、東京在住の方から昭和十二年に寄贈されたということで、昭和八年に亡くなった賢治がこで手に取ることはなかっただろうが、出版されたばかりのこの本を二年前大正十年に就任した岩手県立花巻農学校（旧稗貫郡立稗貫農学校）教諭として、東京等で手にして読んだ可能性は高いと思われる。

- (8) 「土偶坊」の「不軽菩薩」としての「土」のイメージは、『閑居友』に限ることはないと思われる。廣田哲通氏の「法華經常不軽菩薩品二十が生む説話——閑居友上巻九話を基点として」（『説話文学研究』第十八号、一九八三年）に、「四 不軽型説話の構造」として「……①額、手、足が泥だらけであったことをこの型の話がもっている要件として付け加えることができるであろう。……」とある。旅をして乞食をして歩く修行でもあるからである。

- (9) 拙稿「宮沢賢治『雨ニモマケズ』の教材としての本文決定の意義」（『岩手大学教育学部研究年報』第76巻、二〇一七年）

- (10) 鴨長明「発心集」（二二六六年頃）第一の十で「仏みやう（異本「性」と云う乞食）が「かの聖の如く」^{むし}延・こもを重ね着して「逢う人ごとに、必ず「あま・法師・をとこ人・女人等清淨」と云い拜む」と、漢文の偈よりわかりやすい言葉で呼びかけて「不軽行」をおこなっている。

- (11) 『『明月記』断簡紹介』（『明月記研究5』明月記研究会編、二〇〇〇年）嘉禄元年（一二二五）九月十七日の断簡と比定。

- (12) 拙稿「『定家』と歓喜天（聖天）信仰」（『能の背景』能楽出版社、二〇〇五年）

- (13) 大塚常樹「宮沢賢治、その「心象」宇宙のレトリック（Ⅱ）——聖なる（黄金、及び）きたなくしるく澱むもの」考」（『お茶の水女子大学 人文科学紀要第四十六巻』、一九九三年三月）

- (14) 佐野紀子「宮沢賢治小論——黄金色を中心として」（『女子大國文第四十四号』、一九六七年）

※文中の傍線は筆者による。

【付記】

本稿は、平成二十八年度岩手大学研究力強化支援経費による研究成果の一部である。

（たなか・なりゆき、岩手大学准教授）